

北海道白老町（国内 20 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る  
疫学調査チームの現地調査概要

令和 4 年 4 月 16 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 農場の周辺環境

- ① 当該農場は白老川河岸段丘に位置し、周囲は東と南側に牧場、北側は裸地、西側は白老川の河畔林に囲まれていた。農場に接して北側に 25m×120mの池が存在した。
- ② 調査時、農場裏の白老川でマガモを 2 羽確認。調査時には確認されなかったが、通報時に立入検査を行った家畜防疫員によると農場北側の池でカモ類を 1 羽目撃したとのこと。また、農場従業員によると、白老川河畔林付近の沼地においてカモ類を目撃することがあるとのこと。
- ③ 農場隣接地域（農場敷地内含む）で多数のカラス（約 180 羽）を確認。

2 通報までの経緯

- ① 飼養管理者によると、発生鶏舎の 4 月 15 日以前の過去 1 週間の 1 日あたりの死亡鶏は 10 羽程度で推移していたとのこと。
- ② 発生鶏舎（通報時 402 日齢）において 15 日に鶏舎入口側 1～2 列目のケージの主に最下段で 22 羽が死亡、また 1 ケージ内で複数羽（3 羽程度）まとまって死亡していたため、家畜保健衛生所に通報したとのこと。
- ③ 疫学調査時においても、通報時と同一の場所付近において死亡鶏が多数確認され、肉冠のチアノーゼ、顔面浮腫等の症状がみられた。発生鶏舎以外の鶏舎では異常は認められなかった。

3 管理人及び従業員

- ① 当該農場ではパート雇用の飼養管理者が 4 名勤務しており、鶏舎内における飼養管理作業に従事している。その他正規社員 12 名が勤務しており、上記作業に加えて飼養管理作業以外（堆肥運搬等）を実施しているとのこと。
- ② 飼養管理者は鶏舎ごとでの担当分けはしていないとのことだが、飼養鶏 10 万羽ごとに飼養衛生管理者が設定されていた。

4 農場の飼養衛生管理

- ① 車両が農場に入る際は、農場入口に設置された車両消毒装置で車両消毒を実施していた。
- ② 従業員は、出勤時、衛生管理区域外に駐車してから、事務所で農場内専用作業着、靴を着用し手指消毒するとのこと。従業員以外は、事務所で入退場記録を記入後、全身の噴霧消毒、踏み込み消毒、手指消毒を実施しているとのこと。
- ③ 鶏舎に入る際には、各鶏舎入口の前室に設置されているすのこの上で鶏舎内専用の長靴に履き替えた後、踏み込み消毒、手指消毒を実施しているとのこと。
- ④ 鶏舎はウィンドレス鶏舎で、全ての吸気口に金網が設置されていた。
- ⑤ 鶏舎単位で同一日齢の鶏が飼養されており、通報時点では農場内は 11 個のロットに分かれており、123 日齢～750 日齢の鶏が飼養されていた。
- ⑥ 鶏舎ごとにオールイン・オールアウトを行っており、オールアウト後は除糞、鶏舎の洗浄消毒を実施し、3 週間～3 ヶ月空舎期間を設けているとのこと。
- ⑦ 飼料タンク上部には蓋が設置されており、鶏舎内のラインを通して自動で給餌出来る構造となっていた。
- ⑧ 飼養鶏への給与水は井戸水を塩素消毒してから用いているとのこと。
- ⑨ 鶏糞はベルトコンベアで各鶏舎横の集積場に運搬されていた。

- ⑩ 飼養管理者によると、死亡鶏は毎日の健康観察時に回収し、農場内に設置された死亡鶏専用の蓋付きの一時保管容器に投入し、4日に1回の頻度で回収し、場内のコンポストで処理しているとのこと。また、併設されているGPセンターで生じた廃棄卵についても場内のコンポストで処理しているとのこと。

## 5 野鳥・野生動物対策

- ① 飼養管理者によると、農場内においてキツネ、イタチ、タヌキ、シカ等の野生動物を目撃することがあるとのこと。
- ② 飼養管理者によると、月に1回専門業者に依頼し、ネズミ対策（殺鼠剤、粘着シートの設置）を実施しているとのこと。調査時、鶏舎内においてラットサインは確認されなかったが、飼養管理者によると鶏舎内でネズミを目撃することはあるとのこと。
- ③ 鶏糞を搬出するベルトコンベアの鶏舎外への開口部には野生動物侵入防止用の金属製の網が設置されていたが、10cm程度の隙間が確認された。各鶏舎横の集積場には防鳥ネット等は設置されておらず、スズメ、カラス等が飛来していた。集積された鶏糞は近隣の共同たい肥場に毎日運搬し、たい肥化しているとのこと。一部の鶏糞については場内のたい肥場でもたい肥化しているとのこと。
- ④ 場内のたい肥場はコンポストと開放式たい肥化施設と処理後のたい肥置き場が設置されており、鶏糞に加え農場内の死亡鶏やGPセンターの廃棄卵もたい肥場に搬入しているとのことであった。防鳥ネット等は設置されていなかった。GPセンターから場内のコンポストへの廃棄卵の運送時には蓋つき容器を使用していたが、たい肥場には多数のカラス類が飛来しており、処理後のコンポスト産物中に含まれた骨などを農場内に散乱させているとのこと、調査時も場内に鶏の骨と思われるものが確認された。